

Drag & Drop UpTeX for upper El Capitan/Yosemite

1. Drag & Drop UpTeXについて

Drag & Drop UpTeXは、OS X環境に、なるべくコンパクトな日本語TeX処理系を簡単に導入するためのパッケージです。TeX環境をアプリケーション・バンドルのなかに包むことで、任意の場所にDrag & Dropでインストールし、最低限の操作で必要な設定も完了します。その基本コンセプトに変更はありませんが、旧版と新版とでは、以下のような変更が生じています。

(1) 内蔵TeXシステム

旧版：PteTeX/UpTeX → 新版：TeXLive 2017 scheme-small
+ 日本語環境 (collection-langjapanese)
+ α (newtx fontaxes boondox txfonts ec helvetic wrapfig)

* TeXLiveのcollection-langjapaneseにはUpTeX/OTFパッケージが含まれます。

これに加えて、hiraprop, moripriop, kumenten2e, endnotesjを独自に追加し、旧版とほぼ同等の日本語環境を用意しています。なお、OTFパッケージの下位互換であり、いまや使用頻度の低いUTFパッケージのみ、廃止しました。また、bounddviはTeXLive2016の途中からplatex-toolsに含まれるようになったので、独自追加を取りやめました。

(2) アプリケーション・バンドルの仕様

旧版：AppleScriptアプリケーション → 新版：簡易TeXソース編集エディタ

* この変更のため、設定はアプリケーションのダブルクリックではなく、アプリケーションの「環境設定」で行うようになりました。

2. 主仕様と使い方

(1) 基本構造

“UpTeX.app”の実体はフォルダですから、コンテキスト・メニューの「パッケージの内容の表示」で内部を覗き、ファイルの編集・加除を行うことができます。具体的には“UpTeX.app/Contents/Resources/TEX/2017”内に、TeXシステム一式が収まっています。その同階層の“texmf-local”フォルダが、TeXLive/MacTeXにはない、本パッケージ独自の追加ファイルを取っている場所です。ですから、そこに自前のファイルを追加することも可能です。しかし、本パッケージではユーザーの“Library”フォルダ内に“texmf”フォルダがあれば、そこを読むので自前のファイルはそちらに置いておき、“UpTeX.app”内部には手を加えないことを勧めます。

(2) 最初の設定

20160614版以前の“UpTeX.app”をインストールしていた場合には、まず、ユーザーの“Library”フォルダ内の“texlive”フォルダを削除してください。

“UpTeX.app”を、アプリケーション・フォルダなどの任意の場所にコピーしたら、ダブルクリックして起動してください。

* ダブルクリックしても警告が出て起動できない場合は、“UpTeX.app”をFinderで選択してコンテキストメニューから「開く」を選び、表示されたパネルの「開く」ボタンをクリックして

起動してください。次からは、ふつうにダブルクリックで起動できます。

起動後、まずメニューバーの「UpTeX」の「環境設定」から、環境設定パネルを開きます。



最初に必ず「dvipdfmxのフォント」プルダウンメニューから、dvipdfmxで使用したいフォントを選んでください。(yosemite), (El Capitan)はそれぞれの環境用です。プルダウンメニューで任意のフォントを選択すると、バックグラウンドで“`updmap-sys --setoption kanjiEmbed hogehoge`”と“`mktexlsr`”を実行します。なおこの作業は、**2016版から2017版へのアップデートの場合にも、最初に必ずしておいてください。**

*El Capitan以降では、システムの日本語フォントの仕様が大きく変わったため、yosemiteまでのフォントのシンボリックリンクやMapファイルでは対応できなくなりました。本パッケージでは、TeXLive/MacTeX 2015から用意されたEl Capitan用のMapファイルにも対応できるよう、El Capitan/yosemiteそれぞれに対応したヒラギノ・フォントなどのシンボリックリンクを用意することで、どちらの環境でもヒラギノ・フォントを使えるようにしてあります。

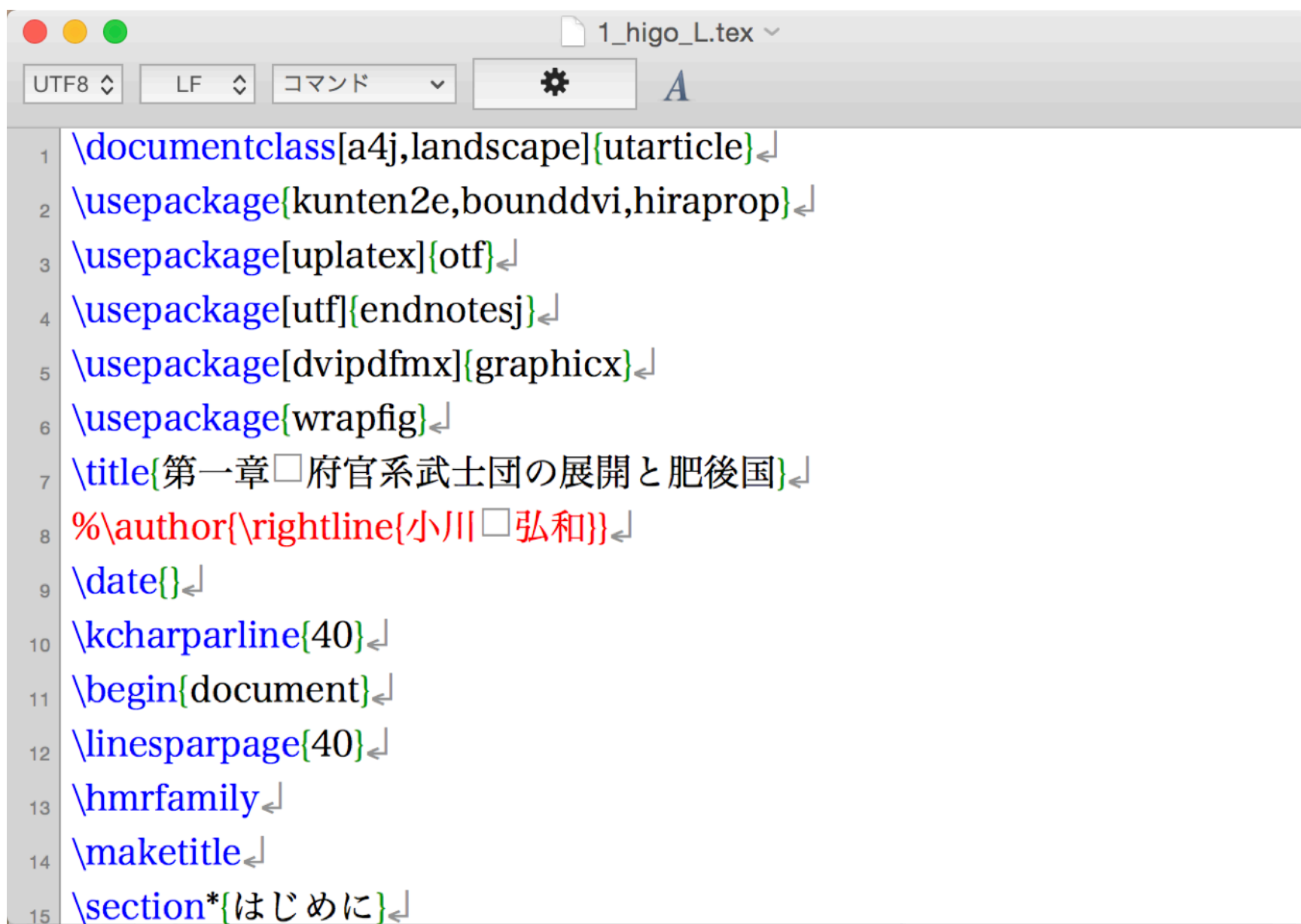
次に、「TeXコンポーネントのアップデート」ボタンをクリックしてください。これは、TeXLiveのアップデート・コマンドである“`tlmgr`”を呼ぶものです。具体的には“`tlmgr --self --all`”を、ターミナルに処理を渡して実行します。わざわざターミナルで処理するのは、アップデートされたコンポーネントの表示やエラーメッセージなどの処理過程を見えるようにするためです。これは初回起動時だけでなく、定期的に行ってください。

「texbinパスをクリップボードにコピー」ボタンは、その名のとおり、TeXShopの環境設定パネルの「内部設定」の「パス設定」への入力や、`.bash_profile`などでのパス設定をクリップボードからのペーストで済ませるための機能です。

「内蔵エディタの初期設定フォント」は、グレーの部分に現在のフォントが表示され、「変更」ボタンをクリックすると、フォント変更のためにフォントパネルが立ち上がります。

(3) 内蔵エディタの使い方

“UpTeX.app”のアプリケーションとしての実体は、ごく簡単なTeXソース編集支援機能をもったテキストエディタです。主な機能は文字コード・改行コードの自動判別と選択。行番号表示とTeX構文のカラーリング、TeXコマンド入力支援、ソースのコンパイル処理といった、TeXShopなどの統合環境の機能を簡略化したようなものです。これらの機能の操作は、ツールバーに集約されています。



```
1 \documentclass[a4j,landscape]{utarticle}↵
2 \usepackage{kunten2e,bounddvi,hiraprop}↵
3 \usepackage[uplatex]{otf}↵
4 \usepackage[utf]{endnotesj}↵
5 \usepackage[dvipdfmx]{graphicx}↵
6 \usepackage{wrapfig}↵
7 \title{第一章□府官系武士団の展開と肥後国}↵
8 %\author{\rightline{小川□弘和}}↵
9 \date{}↵
10 \kcharparline{40}↵
11 \begin{document}↵
12 \linesparpage{40}↵
13 \hmrfamily↵
14 \maketitle↵
15 \section*{はじめに}↵
```

文字コード・改行コードはツールバーの左側のプルダウンメニューにそれぞれ表示され、また、任意のコードへの変更も、このプルダウンメニューから行います。「コマンド」プルダウンメニューは、そこからTeXコマンドを選んで入力します。その具体的仕様については、後に説明します。その隣のボタンは、開いているファイルに応じた処理を行うためのもの。たとえばTeXソースであれば、(u)platexとdvipdfmxを連続的に実行します。これも、ターミナルに処理を渡します。右側の「A」ボタンは、開いているファイルの表示フォントを変更するためのもの。フォントパネルが立ち上がります。

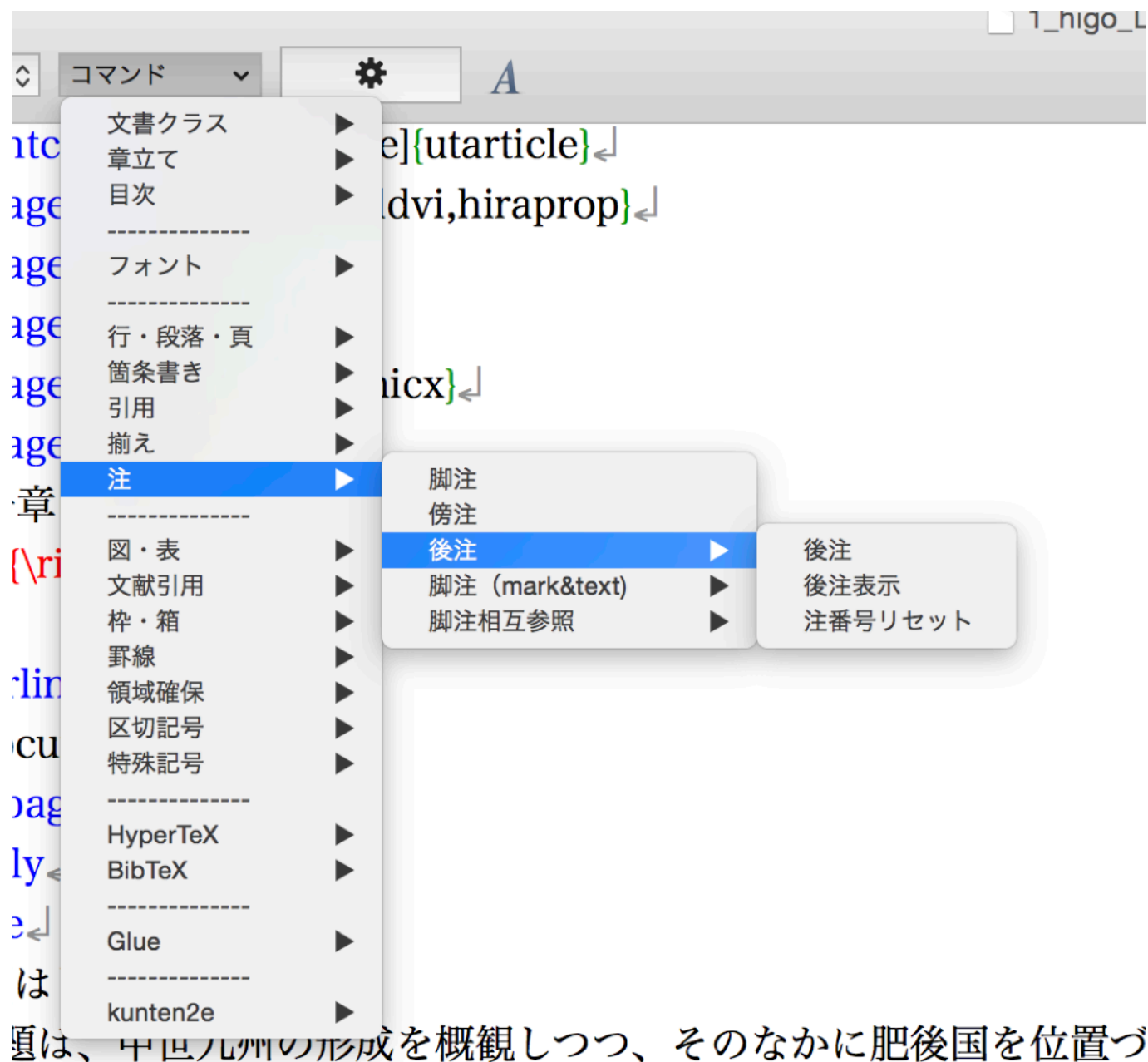
α ファイルの処理

ファイル処理ボタンは、開いているファイルの拡張子を判別して、適切な処理をするためのものです。texに対しては、文字コードとplatexかuplatexかを判別して、(u)platexとdvipdfmxを連続実行し、生成されたPDFを、ユーザーのデフォルトPDFビューワで開きます。idxに対してはmendexを実行し、auxに対しては、pbibtex/upbibtexのどちらを用いるかの選択を求めるパネルが表示され、選択した方が実行されます。なお、それ以外のファイルの場合には「処理できない」旨のパネルが表示されて、処理を中断します。

なお、platexとuplatexとの判別確率は、おそらく100%ではありませんのでご注意ください。また、この機能にはキーボード・ショートカットとして“⌘+Y”を割り当ててあります。

β TeXコマンド入力支援の仕様

「コマンド」プルダウンメニューは、TeXShopの「マクロ」プルダウンメニューと類似の機能で、デフォルトでは、初期のTeXShopに搭載されていた、拙作のものとほぼ同等のコマンド一覧を提供するものになっています。



しかし、この種の機能にはカスタマイズの余地が必要ですから、TeXShopのものの仕様を踏襲してあります。具体的には、コマンド一覧のプロパティリストをアプリケーションが読み込むようになっており、それは“com.dokuroryokan.UpTeX.command.plist”というファイル名で、ユーザーの“Library/Preferences”フォルダに置かれます。“UpTeX.app”は、初回起動時に内蔵したプロパティリストを、この場所にコピーします。よってたとえば、TeXShopの“Macros_Latex.plist”をコピーし、上記ファイル名で“Library/Preferences”に置いておけば、“UpTeX.app”はそれを読み込みます。ただしTeXShopのマクロには、TeXShop固有の機能を呼ぶものが多く含まれており、それらは当然、“UpTeX.app”では使用できません。そこで“Macros_Latex.plist”のバックアップを取ったうえで、TeXShopのマクロエディタや、他のプロパティリスト編集ソフトで編集し、あるいは“com.dokuroryokan.UpTeX.command.plist”をコピーして、同じように編集してカスタマイズするとよいでしょう。

3.本パッケージのJMacro部分を構成する内容と諸権利

(1)kunten2e.sty

大阪大学の金水敏氏 (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kinsui/tex/top.htm>) が作成・公開されているルビ・割注等作成用マクロ。その権利は金水氏に属するものであり、再配布にあたっては金水氏より許諾をいただいております。

(2)endnotesj.sty

LaTeXに当初より含まれている英語版後注作成用マクロendnotes.styに私が手を加え、和文縦組論文で用い得るようにしたマクロ。

(3)hiraprop/moriprop

OTF/UTFパッケージの作者でもある齋藤修三郎氏 (<http://psitau.kitunebi.com/>) が作成された、ヒラギノ・モリサワそれぞれの従属欧文フォントを使用するためのパッケージ。再配布にあたっては齋藤氏の許諾をいただいております。

5.いくつかの注意事項

(1)TeXShopでの設定

旧版に含んでいたスクリプト、“Xtexshop”は、廃止しました。TeXShopの設定プロファイルで“pTeX(ptex2pdf)”か“upTeX(ptex2pdf)”を選び、「パス設定」の項目は、「texbinパスをクリップボードにコピー」機能でクリップボード経由でコピーしてください。

5.免責事項

本パッケージは無償で提供されますが、あくまで無保証であり、その導入・使用によって生じ得る如何なる事態に対しても、パッケージ作成者およびその内容物の一次作成者は、一切の責任を負わないものとします。その将来にわたるバージョン・アップやサポートを約束するものでもありません。また、再配布や改変物配布についても、それぞれの一次作成者が定める条件に従うこととなります。以上に同意のうえで本パッケージをご利用下さい。

6.更新履歴

2017年6月6日 UpTeX.app内蔵のTeXコンポーネントを、TeXLive2017ベースのものに更新した。

2016年9月7日(2) 通常は使わない大量のドキュメント類がTeXコンポーネントのファイルサイズを肥大化させていたため、それらを削除した。

2016年9月7日 UpTeX.app内蔵のTeXコンポーネントを、TeXLive2016ベースのものに更新した。(tlmgrでの更新時にfmtファイルが自動更新されない問題への対処)

2016年6月14日 UpTeX.app内蔵のTeXコンポーネントを、BasicTeX2016ベースのものに更新した。

2015年10月9日 初回起動時に「“UpTeX”は壊れているため開けません。“ゴミ箱”に入れる必要があります。」というメッセージが出る問題を修正。それにともない、Resources直下にあったtexliveとtexbinをResources/TEX/に移動した。

2015年10月5日 「TeXコンポーネントのアップデート」(tlmgrコマンド)の実行時に、Xcodeのインストールを求められる問題を回避するように修正。また、TeXコンポーネントも最新状態にアップデートした。

2015年10月2日 El Capitan対応のヒラギノMapファイルが本家TeXLive/MacTeXにも取り込まれたので、そちらを使うようにするため、先行して独自に用意したものは削除した。また、TeXコンポーネントも最新状態にアップデートした。

2015年9月10日 新版配布開始。

小川弘和

herogw@kumagaku.ac.jp

dokuroishi@icloud.com

<http://www2.kumagaku.ac.jp/teacher/herogw/index.html>